

教 育 長 様

校番 011 福山誠之館 高等学校長**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校  
令和2年度 報告書****1 研究の概要**

## 研究の目標

学習指導要領の改訂や大学入試改革など社会の変容に合わせ、生徒の学びが大きく変わる時期でもあり、特に「探究のスパイラル」を「産業社会と人間」「総合的な学習（探究）の時間」に反映させ、自立的に探究できる生徒の育成に努める。また、今年度からのBYODの導入により、「産業社会と人間」においては、情報機器の活用も必要となる。社会で必要とされる資質・能力を育成するために、メディアをどう利用するかは重要な鍵であり、年間計画に位置付けて、探究を深めるための仕組みを作り出す。また、作成した評価計画をもとに、回数や対象・方法・時期などを工夫して年間でバランスのとれた評価を実施し、それによって生徒のメタ認知能力を向上させていく。

## 総合的な探究の時間等の取組内容

## ① 生徒の状況把握及び分析

本校では、3年次で作成した卒業論文の評価を「本校で育成したい資質・能力」（以下、「資質・能力」とする）と結び付けたルーブリックを用いて評価を行っている。昨年度の卒業論文の評価から、現状の取組では生徒に「探究のプロセス」を理解させることが重点的な要素であり、「探究のプロセス」を用いて、物事を探究し、その結果を発信していくというレベルまでは達していない現状が明らかとなった。本校の探究のレベルを高め、「資質・能力」のさらなる育成につなげるため、今年度は、従来は卒業論文作成に重点を置いていた探究活動（課題研究）を1年次から3年間を通じて行うことで、段階的に「資質・能力」を育成していくことができるのではないかと仮説を設定した。

## ② 育成する資質・能力の設定（共有）

本年度が研究開発最終年度ということもあり、生徒の経年変化を見取るという観点から、「資質・能力」については昨年度と同様のものを設定した。

## ③ 資質・能力の育成に向けた各種計画の作成

①での仮説に係り、教務研修部に所属するカリキュラムデザインチームを中心として、年間のカリキュラムの見直しを行った。その会議において、今年度は1年次での「産業社会と人間」のカリキュラムについて、従来のカリキュラムを刷新し、「探究学習」を基盤としたカリキュラムを作ることとした。その結果、長年の懸案事項であった「産業社会と人間・誠之ナビ・誠之ゼミ」の一貫性を「探究」を軸として持たせることができた。

## ④ ③に基づく教育活動の実施状況

探究活動が3年間の学びの大きな柱となったため、そのプロセスの理解が、生徒・教員ともに重視されるようになった。そのため、今年度は「本校での課題研究のプロセス図」を作成し、1年次、2年次のプログラムに活用した。これによって、課題研究（探究学習）の流れがより明確化された。基本的にすべての年次で探究活動を行った結果、これまでよりも多くの教員が課題研究に携わるようになり、共通したプロセス図の導入も相まって、学校全体の探究学習への理解がより深まった。また、教員によっては、1～3年次のすべての探究活動に関わる場合も増えてきており、その指導のスリム化も課題の1つであった。1年次は、2名の教職員で40名の生徒の活動を支えるため、特に評価の部分の工夫が必要となった。そこで、ワークシートの中にルーブリックを埋め込むなど、できるだけ教員の評価が短時間でかつ生徒にわかりやすい形で示せるように工夫を行った。これによって、教員1人当たり20人という生徒数に対して、課題の発見から論文の作成までを指導しきることができた。

各年次の具体的な取組については次のとおりである。

(1) 1年次「産業社会と人間」(2単位)

4月当初に行われる「学びの扉」について、「SDGs」や「Think Globally, Act locally」などのキーワードをもとに、地域課題に関して、その解決策と検証方法について、記述させた。その結果、現状1年次生がどのくらいの探究にかかわるプロセスを理解しているのかについて実態把握をすることができた。この結果から、「学問に基づく先行研究」の重要性を理解させるためのプログラム「学術分野探究」を6月から行った。本プログラムは「学術分野」についての調べ学習をするとともに、各学術分野がどのようなものを対象とし研究をしているのか、また、SDGsで設定された課題解決にどのように貢献しているのかを調べることを主軸とした。

最後に8月末から課題研究「福山誠之館高校への提言」を実施した。課題解決を「自分事」とすることを目的に、研究対象を生徒にとってより身近なものとする工夫を行った。本校の「環境」をテーマに生徒一人ひとりが研究テーマを立て、前述したプロセス図を参考に研究を深めていった。

(2) 2年次「総合的な探究の時間(誠之ナビ)」(2単位)

1学期に行った「グループ探究」では、研究を「文献研究系」と「実証研究系」に分け、いずれかの研究アプローチを学ぶという内容で実施した。昨年度の課題として、文献研究系のレポートの多くが、課題に対してどの学術分野から解決策を提示しているのかが不透明なものであった(先行研究をもたず単なる持論を展開しているものが多かった)ことを踏まえ、今年度の「文献研究系」のテーマについては、軸となる学術分野を与え(例えば「経済学」や「観光学」のように)、生徒はその学術分野における先行研究を調べていく形で、課題解決を進めるように工夫した。2学期以降は卒業論文の作成に向け、課題研究を進めていった。結果的に課題研究を進める時期が1年次と重なったため、課題研究のプロセス図やワークシートなど共有可能なものは積極的に共有することで、指導の一貫性を持たせることができた。

(3) 3年次生「総合的な学習の時間(誠之ゼミ)」

3年次生では、課題研究における問いの大切さを示し、問いの立て方を確認した上で、仮説を立てて研究に取り組んだ。2年次の段階で先行研究を読みこみ、時間をかけて仮説を立てている状態でのスタートであったため、研究に行き詰まる生徒が減少した。コロナ禍の休校期間中では、G-suiteを活用し、論文作成などのやり取りを行うことができ、論文の作成と評価を行うことができた。

⑤ 評価活動(ルーブリック等の活用等)

④で述べたように、前年次での課題研究の取組により、評価の効率化が必要となった。ルーブリックを用いることの利点の1つに評価のスピード化が挙げられる(ダネル・スティーブンス, 2014)ことから、積極的に評価に活用することとした。ルーブリックは、その活動を開始する際に、その目的と意味を理解させてから活動を始めることとした。単元途中でのルーブリック評価に関しては、その後の展開を考えるための材料として、単元末でのルーブリック評価に関しては、次の単元構成を修正するための材料として使用した。本校で育成したい資質・能力についての自己評価、教員評価を行い、今年度の取組の評価を行った。1年次の結果では6つの観点すべてにおいて数値の上昇がみられた(レベル3の割合【昨年度→今年度】思考力18.0%→56.4%、知識9.0%→72.5%など)。2年次においても、昨年度からの資質・能力の変容において、上昇者の割合がおおむね7~8割となっている。特に、「知識」の資質・能力では昨年度比較で上昇した生徒の割合が9割を超えている。

⑥ 次年度計画への反映

⑤での結果から、1年次については現カリキュラムをベースとし、さらなるブラッシュアップを図る。2年次については、「産業社会と人間」のプログラムを引き継ぐこととし、2学期以降の卒業研究につなげていく。3年次に関しては、今年度の取組を継続し、卒業論文の完成を促していく。

成果

探究活動を主軸に据えることで、3年間の指導に一貫性を持たせることができた。今年度作成したプロセス図やワークシートも本校の探究活動を支える材料とすることができた。また、1年次に導入されたChromebookにより、本校の探究の質は大きく向上した。1年次生から先行論文を調べ、立てた仮説についてデータを収集し、表計算ソフトなどで検証することができ、作成された論文は本校の高校1年生で期待されるレベルを上回るものも多くみられるようになった。

## 課題

コロナ禍の影響もあり、生徒同士のディスカッションなど表現力に関する指導が不十分な状況である。このことについては、次年度以降の取組を通して、改善していきたい。また、次年度は2つの年次で Chromebook を用いた授業展開となる。教員の活用力も含めて、今後の活用研究が必要となる。

## 次年度の目標（育成する資質・能力）及び取組内容

今年度の取組をブラッシュアップさせ、「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」を通じて、自律的に探究できる生徒の育成に努めたい。また、次年度はBYODのさらなる活用を研究テーマの一つとし、探究を深めるための効果的な仕組みを作りたい。

今年度は主に、探究活動のプロセスの理解と、プロセスに基づいた論文の作成方法を主軸に研究してきた。次年度は、今年度作成した論文等の内容をいかに発信していくかを主軸に研究を行っていきたい。可能であれば、外部のコンテスト等も利用し、生徒が積極的に発表する機会を整えたい。また、作成した評価計画をもとに、回数や対象・方法・時期などを工夫して年間でバランスのとれた評価を実施し、指導の改善に活かしていきたい。

本校で育成したい資質・能力に関しては、3年間の実施と検証を終え、来年度以降内容を見直していきたい。具体的には、これまでの6つの項目から項目を少なくした形で実施し、変容を見取りやすくすること、「行動力」を軸とした項目を1つ盛り込むことを中心とし、修正案を考えていく。